

十全に帰属できない共同体という逆理

—太宰治「ロマネスク」論—

A paradox in the text of “Romanesque” written by Osamu Dazai

高橋宏宣

福島工業高等専門学校一般教科

Hironobu Takahashi

Fukushima National College of Technology , Department of General Education

(2012年9月18日受理)

“Romanesque” written by Osamu Dazai consists of three stories. They share three common features. 1. The family relationships between main characters and their fathers break down. 2. Main characters of three stories are dissatisfied. 3. Main characters of three stories fail in doing their special skill. This article analyzes these points, and has concluded that main characters of three stories really wanted to belong to their community but what they had done was far removed from socially acceptable behavior.

Key words: Osamu Dazai, Romanesque, community

1 問題の所在

太宰治の「ロマネスク」(『青い花』昭和九・一二)を構成する三篇(「仙術太郎」「喧嘩次郎兵衛」「嘘の三郎」)の主人公たち(太郎・次郎兵衛・三郎)は、「仙術」「喧嘩」「嘘」を極めようと修行に励み、実際にそれらを十分使いこなすことができるまでになるのであるが、何故か一様に技の行使に失敗し、最終的に江戸の居酒屋で無聊をかこつこととなる。荒唐無稽な修行に耽つて共同体の規範から逸脱し、そこの居場所をなくしていく成りゆきは、一見するところ当然のようでもある。しかし、彼らは身につけた技で目下の状況を一挙に変革することができた筈であり、また、技の行使を繰り返すことにより、状況を変える力だけをいつまでも温存するというやり方で、修行の成果を享受することもできた筈なのである。状況を変える手段を持ちながらその行使に失敗し、何でもできる筈なのに必ず挫折の憂き目にあうという機制の中に、「ロマネスク」の孕む問題の所在を確認できるように思われる。

尾崎一雄が此作に「激しい思考の渦巻」を感じたように、「ロマネスク」の荒唐無稽さの背後には、何らかの仕掛けが巧まれているようにも感じられる³。浅見淵は此作を「浪漫的な作品」と評し、三人の主人公を憧憬の対象と見立てたが、そのような評言は先行論に於いては稀であつて、彼らの言動に寓意や批評性を認める方向性が共有されているようだ。

例えば、芸術にのみ生きる場所を求めた太宰の「すさんだ」虚無の心を荒唐無稽なおかしさの背後に見いだした論⁴や、異能の三者が現実との生き生きした関係を失つて何一つ成就し得なくなつたとする論⁵、時代と対峙しうる批評性を持つ〈俗物的〉なるものの存在をめぐって展開したものとする論⁶がある。その他に、三郎が「ロマネスク」の語り手となる可能性について「嘘」との関連で指摘した論⁷、三郎と「嘘」との関係に作家と物語の関係を見、作家が自らの「嘘」に裏切られていくことを読者に予感させる設定が物語の中に組み込まれているとする論⁸がある。先行論はそれぞれ独自のパースペクティブを有して説得力を持つのだが、主人公たちの修行が悉く失敗に帰する結末を作品論理の中でどのように意味づけるかについては、いまだ議論の余地が残されているように思われる。

太郎・次郎兵衛・三郎の、修行のきつかけから挫折に至るまでの道筋は、概ね次の三点を軸として展開されている。

- ① 父子間の関係が断絶しており、それが原因で子は共同体の規範から逸脱していく。
- ② 共同体の規範から逸脱した子は不全感を感じており、それが修行のきつかけとなる。
- ③ 修行で身につけた技の行使が予想外の結果を招き、共同体での居場所をなくす。

本稿は先ず以上の三点について三話並列的に分析し、共同体の規範から逸脱していった主人公たちが、実は共同体への帰属を志向していたことを明らかにする。その上で、三郎の「芸術家」宣言の内容を検討し、三郎が運命づけられた挫折を「芸術家」としての真正さを担保するものと価値転倒させていった経過について、明らかにする予定である。

2 父子間の断絶

「仙術太郎」「喧嘩次郎兵衛」「嘘の三郎」の冒頭は、主人公たちの父親について語っている。敏形惣助は「神柳木村」の「庄屋」であり、鹿間屋逸平は「三島」で造り酒屋を営む一方「火消し頭の名誉職」を務め、原宮黄村は「江戸」で「学者」をしている。いずれも各共同体に於いて何らかの権限や権威を持つ者である。また、敏形惣助は「ひとまうけしようといふ下心」を持ち、鹿間屋逸平は「不当の利益をむさぼり」、原宮黄村は「吝嗇」である。そして、父親たちは我が子に自分の地位を引き継ぐことを望んでいた。敏形惣助は太郎が庄屋になることを期待していたふしがあるし、鹿間屋逸平は次郎兵衛に「火消し頭の名誉職」を継がせ、原宮黄村は三郎を塾の後継者(「若先生」)にした。共同体の規範を代表する立場にある父親たちの関心は、我が子への地位の継承と富の蓄積にあるのだが、子供たちは父親たちの期待を決して内面化しようとはしない。

太郎は「口をたいぎさうにあけ」て授乳を待ち、玩具を与えられても「退屈さうに眺めてゐるだけ」であり、生まれつき外界に対して無関心であった。長ずるに従い怠惰な性質は甚だしくなつてゆき、太郎は村人からだけではなく、父親からも「なまけもの」と見なされるようになる。太郎の形象化に関しては御伽草子の「ものくさ太郎」や寝太郎説話が踏まえられているが、「ものくさ太郎」は、初めひどい不精者であった男が人より優れた和歌・連歌の才能により帝に認められ、妻を娶つて立身出世を果たし、宝に恵まれていく話であるし¹⁾、寝太郎説話も、結婚による家跡の継承を果たす男の話をもく持つ²⁾。そうした原型と比較すると、立身出世や言語的才能、労働と全く無縁な太郎の性質は、際立つていと言わねばならない。

太郎は村の秩序をも簡単に踏み越える。神那木川が氾濫した際、村人は餓死の不安と危機を克服できない無力感に苦しみ、夜ごと「相談」を重ねていた。村人にとっては「相談」すること自体が目的であり、それにより辛うじて連帯を保とうとしていたわけである。この危機に際し、「十歳」の太郎は「殿様」への「直訴」を提案し、惣助が制止したにも拘わらず、実行してしまふ。

これは簡単に解決がつくと思ふ。お城へ行つてちきちき殿様へ救済をお願いすればいいのちや。おれが行く。惣助は、やあ、と突拍子もない歓声をあげた。それからすぐ、これはかるはずみなことをしたと気づいたらしく一旦ほどきかけた面手をまた頭のうしろに組み合わせてしかめつらをして見せた。お前は子供だからさう簡単に考へるけれども、大人はさうは考へない。直訴はまかりまちがへば命とりちや。めつさうもないこと。やめろ。やめろ。その夜、太郎はふところ手してぶらつと外に出て、そのまますすたと御城下町へ急いだ。誰も知らなかつた。

「直訴」により「簡単に」危機の「解決がつく」と言う太郎の「意見」は、「子供」らしい素直な提案であり、微笑ましくさえある。しかし、実際には「直訴」は「命とり」になる「めつさうもないこと」であり、それ故惣助は「やめろ」と太郎に命じたのであるが、太郎は聞き入れない。「大人」の「相談」とは無縁のところ、誰も知らなかつた間に自分の「意見」を通してしまふ自己本位な姿は、太郎が「十歳」にして村の秩序から完全に逸脱していることを示すものである。協働や連帯の秩序を重んずる惣助と、惣助の言葉を聞き入れず、それゆゑ村の秩序から逸脱していく太郎との間には、埋め難い断絶が存在するのである。

次郎兵衛は、「不当の利益をむさぼ」る家業を嫌う深癖な男として登場する。

彼の気質の中には政治家の泣き言の意味でない本来の意味の是々非々の態度を示さうとする傾向があつた。それがために彼は三島の宿のひとつから、ならずもの、と呼ばれて不潔がられてゐた。次郎兵衛は商人根性といふものをきらつた。世の中はそろばんでない。価のないものこそ貴いのだ、と確信して毎日のやうに酒を呑んだ。酒を呑むにしても、不当の利益をむさぼつてゐるのをこの眼でたしかにいままで見て来た彼の家の酒を口にすることは御免であつた。もしあやまつて呑みくだした場合にはすぐさま喉へ手をつっこみ無理にもそれを吐きだした。

次郎兵衛は「商人根性」を嫌い、「家の酒を口にすること」を忌避する。次郎兵衛は父親と家業を明確に否定する子供である。そんな次郎兵衛を父の逸字は「馬鹿」だと決め込んでいるが、次郎兵衛は反抗精神の猛々しい単なる「馬鹿」ではない。次郎兵衛は「是々非々の態度」で自分の正しさを押し通す独善家の「気質」を持ち、「価のないもの」の貴さを信じて「毎日」三島のまちを「ひとりして呑みある」く無頼漢である。次郎兵衛は次郎兵衛なりの信念を持つて勤労と共同性への反旗を掲げ、共同体の秩序から自ら進んで逸脱していったのであつた。

三郎の場合、父親の黄村が「支那の宗教」に通じた学者であり、「八歳」になるまで「支那の君子人の言葉」を暗誦させられていた。「支那の宗教」とは儒教であり、三郎は五倫を尊ぶ儒教道徳により身を律

することを期待されていたのだが、父子の親を踏みこむ次の挿話は、この親子の間にも深い断絶があったことを示している。

三郎の嘘の花はこの黄村の蒼蒼から芽生えた。八歳になるまでは一銭の小使ひも与へられず、支那の君子人の言葉を暗誦することだけを強ひられた。三郎はその支那の君子人の言葉を水漬すすりあげながら呟き呟き、部屋部屋の柱や壁の釘をぶすぶすと抜いて拵いた。釘が十本たまれば、近くの屑屋へ持つて行つて一銭か二銭で売却した。花林糖を買ふのである。あとになつて父の蔵書がさらに十倍くらゐのよい価で売れることを屑屋から教はり、一冊二冊と持ち出し、六冊目に父に発見された。

黄村の「蒼蒼」が幼少の三郎を抑圧していたとはいえ、学者の生業を支える「蔵書」を売ってしまうという三郎の「盗癖」は、許し難いものである。その身勝手さは「支那の宗教」の教えに著しく反している。黄村が「涙をよるつて」三郎を「折檻」したのも、自己中心的な性向を危惧してのことであつた筈である。

以上、「仙術太郎」「喧嘩次郎兵衛」「嘘の三郎」に共通して確認できる父子間の断絶とは、或る原因があつてその結果生じたというような、個別の生活史を通して形成されたものではない。既にそうである所与の前提として各篇に導入されている。そして各篇は、父子間の断絶を埋め合わせ、それが生じる以前の状態を回復する方向、即ち父子の和解へと決して向かわない。父が共同体の規範を代表する存在で、子が父の期待や教えに寄り添おうとしない以上、子供たちが共同体の秩序から逸脱し、共同体と自分との間に回復不能な溝を作り出してしまふ趨勢は必然である。しかも、父子間の関係を修復しようと助力する者(母)が三篇とも不在であるため、父子間の断絶は勿論のこと、共同体と主人公たちとの間に生じた溝が埋められることもないのである。

3 共同体からの逸脱が齎す不全感

共同体の秩序から逸脱し、共同体と自分との間に埋め難い溝が生じた状況に対し、主人公たちは不全感を感じている。太郎の「仙術」、次郎兵衛の「喧嘩」、三郎の「嘘」は、それぞれの抱える不全感を克服するために選択されたものであつた。

太郎は生まれつき生への意欲を欠き、父の期待を感受せず、村人の思惑にも無関心であつた。そのような太郎を村人たちは「なまけもの」「阿呆様」と呼んで蔑んでいる。惣助は幼年時にそ太郎の理解不能な側面に「予言者」としての能力を期待したが、やがてその怠惰と愚昧に呆れ果て、太郎を「馬鹿」「阿呆」と確信するようになる。

自分に対する村人や父親の評価を太郎は確かに感受している。太郎の「仙術の奥義」は「面白くないといふ呪文を何十べん何百べんとなくくりかへしくりかへし」唱えることであつたが、この場合、「面白くない」とは望ましい状態ではなく満足できないという意味である。この呪文は自分の置かれた状況に対して満足していなかつた太郎の姿を判然と写し出している。

次郎兵衛もまた、正しいと確信する己の行いを忌み嫌う三島の人々に対し、強い不満を持つていた。三島大社の祭で傘を貸し与えようとした娘に対し、次郎兵衛は次のように胸中で独白している。

やいお師匠さんの娘。おまへの親爺にしるおふくろにしる、またおまへにしる、おれをならずもの呑んだくれのわるいわるい悪者と思つてゐるにちがひない。ところがどうぢや。おれはあゝ気の毒なと思つたならかうして傘でもなんでもめんだうしてやるほどの男なのだ。ざまを見る。

次郎兵衛は、「娘」とその「親爺」「おふくろ」が自分を「ならずもの」「呑んだくれ」「悪者」と思ひ込んでいるに違いないと推断している。次郎兵衛は自分が世間でそのように見なされていることを知っているのであり、そうした世評に不満を抱いている。そして、この機会に世人の思い込みを正してやろう

と意気込んだのであったが、次郎兵衛の意図が「娘」に伝わることはなく、試みは徒勞に終わる。

この件をきっかけとして、次郎兵衛は「喧嘩」の「修行」を始めることになる。その際、「理屈もくそもなく触れたものを斬るのが「よい」という無体な信条を掲げたことから明らかなように、世人に対する次郎兵衛の不満は尋常なものではなかったのである。

三郎の場合、「殺人」を犯して「誰にも知られぬ犯罪の思ひ出」に苦しみ、「自分の犯罪をこの世の中から消し、またおのれの心から消さうと努め」るために、元来の「嘘」つきの性質を「磨き上げねばならなかった。三郎の不全感、太郎や次郎兵衛よりも遥かに切実なものであった。

太郎・次郎兵衛・三郎の「修行」は、選択した術法で目下の状況を一挙に変革できる点で全能的である¹³⁾。こうした全能性への志向は、自分を取り巻く状況に対する強い不全感の裏返しとして捉えることができる。

自分に対する悪評や犯した罪の意識に思い悩み、生きることへの不全感を抱いていたという点で、見かけや振る舞いとは反対に、三人は共同体と自分との間の齟齬に敏感であったと言えよう。そして、「ロマネスク」の特異な点は、三人が齟齬を解消しようとした際、共同体に適應することによってそれを実現しようとしたことなのである。

4 共同体への志向

太郎に転機が訪れたのは「十六歳」の時であった。蔵の中で見つけた仙術の本を基に、欲望の赴くまま異物に化身する「法」を身につけた太郎は、隣家の娘に「惚れられたい」と願うようになる。太郎は「津軽いちばんのよい男」に変身を遂げて娘の心を射止めようと、「十日」にわたって仙術を試み続けた。しかし、太郎には「津軽いちばんのよい男」の容貌などわからない筈である。太郎はそれまで自分の属する共同体（「神楽木村」「津軽の国」）に無関心であったが故に、そこでの男の容貌の良否など分からず、「いちばん」など想像できなかつたに違いない。目指す対象の分明でない「仙術」が、太郎の意図に反する結果を齎したのは当然であった。

太郎は怠惰な上に共同性を軽視するような行動を取る反共同体的性質の持ち主であった。にもかかわらず、「修行」によって化身の技を身につけた後は、「津軽いちばんのよい男」として隣家の娘に認められようとする。それは、共同体の基準に準拠しようとする行為に他ならない。太郎にとつての「修行」とは、共同体と自分との間の埋め難い溝によって生じた不全感を全能的な力によって解消し、再び共同体の規範に束縛されない自由な境地を獲得するための企てであった筈である。それなのに、太郎は「仙術」で共同体の規範に寄り添おうと試みてしまうのである。

事情は次郎兵衛でも同じである。次郎兵衛は当初、「価のないもの」「こそ貴い」という信条を抱懐して毎日酒を飲み歩く「ならずもの」であった。三島大社の祭りで娘に立ち去られた件をきっかけに、次郎兵衛は身に受けた不条理（「莫迦げた目」）を暴力で解決することを決意して「修行」を開始し、以前にも増して反共同体的性質を強めていくこととなった。

しかし、「喧嘩」の奥義を体得したのと時を同じくし、次郎兵衛は「不当の利益をむさぼつてゐる」家業に与えられた「名誉職」である「火消し頭」の地位をすんなり引き受けてしまう。家業の酒を誤飲した際には「すぐさま喉へ手をつっこみ無理にもそれを吐きだした」潔癖さを持ち合わせていた次郎兵衛にとつて、「不当の利益」の蓄積に対して与えられた「名誉職」は忌避すべき地位の筈であった。しかも、次郎兵衛は「火消し頭」として「信頼」され「うやまはれ」、「頭」の役割を演じ切つてしまうのである。

忌避すべき筈の地位を務めている矛盾を、次郎兵衛は「これはまたこれで結構なことにならひないのだらう」という「なま悟り」によつて、覆い隠そうとする。次郎兵衛は不条理な出来事に出会った際にそれを暴力で解決するような無法状態を志向して「喧嘩」の「修行」を開始したのに、結果的には、太郎と同様、共同体の規範に回収されていく道筋を選択してしまうのである。

三郎の場合も又、基本的には太郎・次郎兵衛の場合と事柄は変わらない。殺人を犯した三郎には、「自分の犯罪をこの世の中から消し、またおのれの心から消す」ための「嘘」が必要であった。「嘘」とは、

共同体の正規の一員として生きることが許されない自分を偽装するための手段であり、それ故共同体に帰属できない自分を強く意識させるものであった。

しかし、捏造した母の思い出を近所の人に語って同情を集めることに成功し、「嘘」が共同体と自分との間の溝を埋めて自己の不全感を和らげる手段となり得ることを知ると、三郎は「嘘」を媒介として共同体と密接に関わってゆこうと試みる。「嘘」の「手紙」の代筆や、「能ふかぎりの悪ぶさげとごまかし」に満ちた「人間万事嘘は誠」の上梓がそれである。三郎の「嘘」は、生きることの苦しさを感じさせるものから生きることを楽しむする推力へと変わり、その完成度を金銭で計量する言葉の実験とさえなったのである。

当初自分と共同体との間に横たわる埋め難い溝を覆い隠す手段であった「嘘」は、磨かれるに連れ、三郎を共同体の規範に徹底的に同化させ、更には規範の中核（「お殿様」）に偽りの座を占めさせることさえ可能にした。

しかし、三郎だけは「嘘」の全能感を早々に挫かれ、共同体と自分との関係について一度吟味することになる。三郎の父親黄村は、遺書に次のように記して三郎を困惑させた。

わしは嘘つきだ。偽善者だ。支那の宗教から心が離れば離れるほど、それに心服した。それでも生きて居れたのは、母親のないわが子への愛のためであらう。わしは失敗したが、この子を成功させたかったが、この子も失敗しさうである。わしはこの子にわしが六十年間かかっていたためた粒々の小銭、五百文を全部のこらず与へるものである。

「支那の宗教から心が離れ」たにもかかわらず、それに「心服」する矛盾に耐え得た理由を、黄村は「母親のないわが子への愛のため」と説明している。「嘘つき」で「偽善者」であることを告白する黄村の「わが子への愛」が、本物であるかどうかは疑わしい。死に臨んでさえ我が子の「成功」を素直に期待できない精神の「吝嗇」に、三郎は「嘘の末路」を見い出して青褪める。

一方で、「嘘つき」を自認する黄村の死は、三郎に「嘘つき」を外側から検証する機会を与えることにもなった。

嘘は犯罪から発散する音無しの屁だ。自分の嘘も、幼いころの人殺しから出発した。父の嘘も、おのれの信じきれない宗教をひとに信じさせた大犯罪から絞り出された。重苦しくてならぬ現実を少しでも涼しくしようとして嘘をつくのだけれども、嘘は酒とおなじやうにだんだんと適量がふえて来る。次第次第に濃い嘘を吐いていつ、切磋琢磨され、やうやく真実の光を放つ。これは私ひとりの場合に限ったことではないやうだ。人間万事嘘は誠。（略）黄村の骨をいねいに埋めてやつてから三郎はひとつ今日より嘘のない生活をしてやろうと思ひたつた。みんな秘密な犯罪を持つてゐるのだ。びくつくことはない。ひけめを感じることはない。

殺人を犯して以来、「嘘」の作為性と疚しさにばかり気を取られてきたが、「重苦しくてならぬ現実を少しでも涼しくしようとして嘘をつく」のは「私ひとりの場合に限ったことではない」と三郎は気づいた。「嘘」とは誰でも吐くものだ」と結論した三郎は、「びくつくこと」も「ひけめを感じる」こともなく生きればよいとの自信を得ている。

しかし、三郎は世人と同じように「嘘」を吐き続けることを拒否し、その反対に、「嘘のない生活」を決意する。「嘘」の共同性に加担し、その意味で共同体に順応していた三郎は、「嘘のない生活」を忘すことにより、再び共同体から脱落し始める。その成果は「無意志無感動の痴呆の態度」として結果し、「嘘のない生活」は実現されたとに思われた。だが、結局のところすべての試みが「嘘の上塗り」にすぎないと知った三郎は、居酒屋に出かけて太郎・次郎兵衛と邂逅し、二人の話を聞いた上で「芸術家」宣言を発することになる。「芸術家」としての「生きかたの模範」を「世人」に書き送るといふ三郎の宣言が、共

同体の存在を強く意識したものであることは言うまでもなからう。

太郎と次郎兵衛、そして三郎は、方法や順序に違いこそあるものの、共同体の規範や秩序の外側へ出ることを一度は望みながら、最終的には共同体の編成に連なるところへと戻ってきてしまう。勿論そこに三人の安住の場所はない。共同体の外側へ出ようとした者を再び内部へと引き戻す力こそ、「ロマネスク」を粹づけるものにはかならない。

5 十全に帰属できない共同体

私たちは芸術家だ。さういふ嘘を言つてしまつてから、いよいよ嘘に熱が加つて来たのであつた。私たち三人は兄弟だ。けふここで逢つたからには、死ぬるとも離れるでない。いまにきつと私たちの天下が来るのだ。私は芸術家だ。仙術太郎氏の半生と喧嘩次郎兵衛氏の半生とそれから借越ながら私の半生と三つの生きかたの模範を世人に書いて送つてやらう。かまふものか。嘘の三郎の嘘の火焰はこのべんからその極点に達した。私たちは芸術家だ。王侯といへども恐れぬ。金銭もまたわれらに於いて木葉の如く軽い。

右は三郎の「芸術家」宣言である。地位の継承と富の蓄積にのみ関心があつた彼らの父親たちの否定を念頭に、権威（「王侯」）に与せず「金銭」の誘惑とも無縁な自分たちを「芸術家」とする発言は、共同体の規範を相対化し、新しい価値を生み出す者として三人が生き直す可能性について言及したものであり、三人の今後の行方を示唆しているようにも思える。

しかし、この宣言は「嘘」である。この「嘘」を内容の虚偽を意味するものとする、事態はどう解釈可能になるであろうか¹⁴。

三郎の宣言の骨子は、「芸術家」である三人の「半生」が「生きかたの模範」なので、それを「世人」に書き送つて認めさせるといふものであつた。それが「嘘」であるとなると、宣言の実質は、三人の「半生」は「世人」に書き送られることはない、なぜなら「生きかたの模範」ではないからだ、となる。太郎と次郎兵衛と三郎の「半生」は、いかなる意味においても共同体の「生きかたの模範」ではない。その「半生」から敢えて「生きかたの模範」を引き出すとすれば、太郎のようにでもなく、次郎兵衛のようにでもなく、三郎のようにでもなく生きる、即ち共同体と自分との間に齟齬や懸隔を感じないように生きることこそが「模範」ということになるであろう。

そもそも、共同体と自分の間に齟齬や懸隔を感じている主人公を並列的に取り扱い、獲得した技の行使の失敗を失敗のままに終わらせているのはなぜだろうか。

共同体とは、構成員が同じ空間で同じ時間を共有し、直接的に関わることを通じて相互の関係性を積み上げていく場である。従つて、はじめから共同体に帰属することを拒んでいる、あるいは拒まれていた人物が作品で取り扱われている場合、彼らは他の成員には意識化されない共同体の瑕疵に気づく者として、共同体の保守性や後進性を炙り出す役割を担われていると、ひとまずは言えよう。しかし、「ロマネスク」の場合は、太郎・次郎兵衛・三郎の三者とも、初めは共同体の規範の外部に身を置いていたものの、後にはその内部を志向することになってしまう。

先述したように、「ロマネスク」は、共同体の規範や秩序の外側へ出ることを望んだ主人公たちを共同体の内部に引き戻す力によつて粹付けられていた。この力は、「神楽木村」「三島の宿」「江戸」といった共同体が、主人公たちをその内部へと強く誘惑する場として機能することによつて生じたものである。

「ロマネスク」の共同体は、主人公たちにとって、他者との関係性を構築する場でもなければ、異端である自分たちを排除する閉鎖的な場でもない。太郎と次郎兵衛の逸脱は際立っていたが、それは二人が反共同体的傾向を濃厚に持っていたからであつて、共同体が閉鎖的であつたためではない。「ロマネスク」の共同体は、主人公たちに参入を促しながら、決して十全な帰属を許さない場である。だから、そこへの帰属を試みて主人公たちが全能的な技を行使する時、挫折の度合もまた甚だしいものとなるのである。

帰属を欲しながら決して十全に帰属し得ない共同体に繋留されてあるが故に、共同体との関係を有しようとする限り、疎外感を感じていなければならない——こうした共同体と自己との関係について、三郎だけは気づいている。三郎は共同体で安住できる場所が自分たちにはないことを知っているから、「嘘」の「芸術家」宣言を発したのである。結論を先取りした「嘘」である以上、それは戦略的なものとなる。三郎は自分たちが共同体に十全に帰属できないことを逆手にとり、運命づけられた挫折や敗北を「生きかたの模範」へと価値転倒し、「芸術家」としての真正さを担保するものに変えたのである。決して成就されることのない「私たちの天下」を真剣に目指す疾しさを、「出まかせの大嘘」や「嘘の火焰」で覆い隠した後は、行為の純粋さだけが意識されることになるであろう。

太郎・次郎兵衛・三郎は、荒唐無稽な振る舞いによって共同体の規範や秩序を相対化できる「芸術家」の資格を得、三郎が代表して共同体の通俗性を批判したのではない。権威や富と無縁ゆえに共同体の通俗性を批判できるような無垢なる存在を生み出すために、十全に帰属できない共同体が要請され、三人がそこに繋留された結果、荒唐無稽な振る舞いを演じることになったのである。結果として見れば、三人は共同体の通俗性とは距離を置いた「芸術家」の位置に立っているのだが、そうした彼らの立ち位置の確保の仕方、「ロマネスク」固有の有様を認めることができるのである。

「ロマネスク」は、共同体の中で挫折を運命づけられた者が、その挫折ゆえに共同体に新たな価値を生み出したり理想を追求したりする者へとなり得る可能性を描き出している。共同体の中に安住できる場所がないことを知りながら、共同体に連なる可能性を見出そうとする三郎の姿は、「反立法」としての自己の役割を自認し、「悪役」を買うことで「次に生れる健康の光」を見出そうとする「姥捨」の嘉七の姿に通ずる。そして、嘉七の姿が、裏切り者故にキリストの至高性を描き出すことのできた「駆込み訴へ」のユダの姿に重なっていくことは、今更言を俟たない。挫折を運命づけられた者が、十全に帰属できない対象や対等になり得ない相手との関係を梃子として、理想の境位を描き出していくモチーフの源流に、「ロマネスク」は位置している。

注

- 1 「同人雑誌評」(『早稲田文学』昭和一〇・一)
- 2 太宰は「ロマネスク」について、「滑稽な出鱈目に満ち満ちてゐますが、これは、すこし、すさんでゐますから、あまり、おすすめできません」(『他人に語る』、『文筆』昭和一三・二、後に「晩年」に就いて)と改題。引用は『太宰治全集II』筑摩書房、平成一一・三に拠る)と述べている。「滑稽な出鱈目」に「満ち満ちてゐ」ながら「すさんでゐ」という評言は、諧謔にある種の批評性を含意させる意図が太宰にあつたことを示唆するものである。
- 3 「同人雑誌評」(『早稲田文学』昭和一〇・二)
- 4 東郷克美「逆行と変身—太宰治『晩年』への一視点」(『成城大学短期大学部紀要』昭和四八・一)
- 5 服部康喜「『ロマネスク』論—異能の逆説」(『活水日文』昭和六三・三)
- 6 山崎正純「太宰治における〈通俗性〉の問題—「ロマネスク」論の試み」(『昭和文学研究』29、平成六・七)
- 7 関谷一郎「『ロマネスク』」(『解釈と鑑賞』昭和六〇・一一)
- 8 安藤宏「太宰治における「物語」と「私」—「ロマネスク論」」(『国語と国文学』平成二・一〇)
- 9 太郎の意味不明の「かたこと」を解説した惣助は、「庄屋のせがれは庄屋の親だわ。三歳にしてもうはや民のかまどに心をつかふ」と考えている。幼くして民に心を配る太郎に庄屋としての優れた適性を見出す惣助は、庄屋としての太郎の将来に期待を抱いていると言える。
- 10 日本古典文学全集36『御伽草子集』(小学館、昭和四九・九)に拠る。
- 11 柳田國男「隣の寝太郎」(『枕太郎の誕生』昭和八・一、三省堂)によれば、「世の中の為になる労苦」と「完全なる花嫁を買って家を興す」という奇話の英雄の二大事蹟のうち、寝太郎説話は「求婚手段の成功の方に力を入れて説くものが多い」という(引用は『柳田國男全集第六巻』筑摩書房、平成一〇・一〇、に拠る)。好笑を目的とする要素が多分に流入しているとは言え、寝太郎説話に於いては、男が共同体や家に対して有為なことをするという要素まで脱落することはない。
- 12 父子間の断絶については注7で指摘がある。
- 13 二人の修行については注5で「三者の異能は、まるで全能に似た可能性を示す筈であつた」と指摘されている。

¹⁴ 田中美「「ロマネスク」論—〈再読〉を促す〈語り手〉の誕生」（『国文学』平成三・四）は、虚構形式との関連で「嘘」を捉え、「芸術家」宣言に於ける三郎の「嘘」が「〈私小説を超える芸術家〉である〈物語作家〉」となるための「実践」であったとする。

※「ロマネスク」作品本文の引用は『太宰治全集2』（筑摩書房、平成一〇・五）に拠り、引用に際してルビは省略し、旧字体は新字体に改めた。

